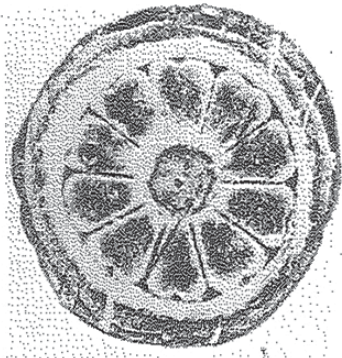


近江の古瓦 IV 湖東南半部

湖東地方のうち、愛知川以南の地である八日市市・近江八幡市と神崎郡・蒲生郡に属する地域を湖東南半部として、この地域出土の古瓦について述べることにします。

神崎郡と八日市市の古瓦

能登川町の安土山東麓では、干拓後、複弁8葉蓮華文に珠文帯がめぐる古瓦や鋸齒文・X字文の外縁破片などが発見され、さらに最近の調査でも古代の瓦が出土しています。しかし、これがこの地における寺院の存在と結びつくかどうかは疑問です。小川では、明治の中頃発見された瓦の拓本が知られています。



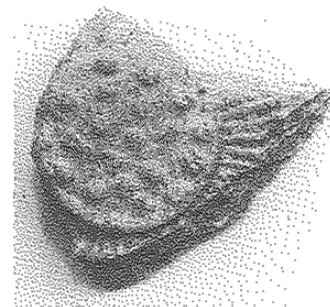
小川出土古瓦拓本

これを平安時代のものとする意見もありますが、拓本を見ると、もっと古い時代の瓦で、古式の素弁10葉蓮華文のようです。佐野の法堂寺跡は、現在町の史跡に指定されており、多くの古瓦が出土しています。軒丸瓦は複弁8葉のものと同弁12葉のものです。複弁系の場合は、無子葉の弁が二つ並んで複弁を作っているような形で、弁の間には細かい間弁があります。蓮子は1+7+9で外縁には鋸齒文があるようです。単弁系の場合は12葉で、弁の先端が角張った形の特異なものです。蓮子は1+8で、これも鋸齒文があります。このほか、猪子でも古式の瓦の出土が伝えられていますが、これには疑問点もあり、ここでは割愛することにします。

五個荘町木流については、このあたりに道
1983. 7. 30

路の方向が正しく東西・南北を示す区域があり、古瓦の出土とあいまって、古代寺院の存在が考えられます。出土の古瓦は、外縁に重圏文をもつ単弁8葉の軒丸瓦と、重弧文の軒平瓦であります。軒丸瓦の中房は比較的小さく、蓮子は1+6で、中央の蓮子が二重目の6個に比し小さいのが特長です。軒平瓦は三重弧文ですが、平面に凹線を入れたようなものと、溝の幅の大きいものの二種類があるようです。このほか、伊野部の五十坊遺跡にも白鳳時代の古瓦出土が伝えられていますが、詳細は不明です。

八日市市では、大阪の四天王寺の瓦を焼いたとの伝承のある瓦屋寺に、単弁の軒丸瓦が1個所蔵されています。これは同寺の寺地で出土したとも言われていますが、山麓の窯から出土したとの説が首肯されそうです。この軒丸瓦は近江八幡市千僧供廃寺出土のものと同種のもので、10葉の無子葉の弁の間に同じような間弁があり、蓮子は1+6で、白鳳時代のものとしてよいでしょう。次に、数年前にこの瓦屋寺のある山の麓で古代の瓦が発見されました。これは瓦窯の出土品のようです。複弁系と思われる軒丸瓦の中房の部分だけの破片がありますが、蓮子が整然と並んでおり



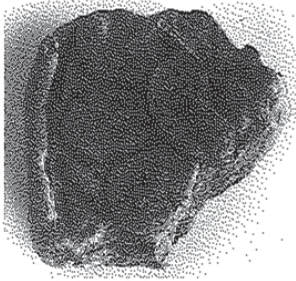
瓦屋寺窯跡出土古瓦

ません。20個ほどの蓮子が雑然としているのです。ほかにも小片のもの等があり、これらはいずれも白鳳時代か、降っても奈良時代のものと見

てよいのでしょうか。

蒲生郡の古瓦

まず安土町から述べましょう。安土町では安土山の西麓に古瓦の出土地があります。そのほかに、金箔瓦など中世以降の瓦も多く出土していますが、この中・近世のものについては本シリーズでは言及しないこととします。安土山西麓の文様のある瓦は、2個の鬼板破片と1個の単弁系軒丸瓦ですが、残念ながらこれらの瓦を用いた寺院遺構は発見されておりません。鬼板破片は1個が鬼板の左上の部分、他の1個が右辺の中央から下の部分と思



安土出土鬼板



がやや角張って先のとがった突出部があり、この突出は間弁にも見られる8葉のものです。蓮子は1+5で、外縁には三重の

われます。復原すると中房には1+6の蓮子があった単弁8葉の蓮華文が6個からなっていたと思われます。これについては梅原末治博士がかつて復原を試みられ、それによった復原石膏模型が県立琵琶湖文化館にあるので、これを掲げて参考に供したいと思います。この鬼板の示す時期は白鳳時代です。次に、軒丸瓦は九品寺跡と称される、鬼板破片の出土地よりは少し南に位置するところから出土したらしく、非常に特殊な文様のものです。中央が凹んだ単弁に極めて小さい子葉があり、しかも弁の大きさは不揃いで、最小のものには子葉がありません。中房には蓮子がなく、やや凹んだ中に不規則な盛り上がりがあるだけです。それに平縁がめぐっています。時期については、瓦の文様が特殊なため確言しかねますが、一応奈良時代よりは降らないものとしておきましょう。

竜王町では、川守の日野川に面した山麓の雪野寺跡から古瓦が出土しています。ここは

かつて多くの遺物を出し、寺の遺構も一部調査されたところです。この地出土の塑像については、本シリーズの「奈良朝廃寺」で述べられています。この寺院跡出土の古瓦には、軒丸瓦・軒平瓦共に数種類が見られます。まず複弁8葉の軒丸瓦について見ましょう。弁は普通よく見られるものですが、中房に作られた蓮子に特色があります。それは、中央の1個と二重目の8個に対し、三重目として極めて小さい蓮子が8個めぐっているのです。周縁には鋸歯文が施されています。次に単弁系のものを二種類述べましょう。一は、弁端

がやや角張って先のとがった突出部があり、この突出は間弁にも見られる8葉のものです。蓮子は1+5で、外縁には三重の円圈があります。もう一つのもは、やはり8葉ですが、蓮子は1個だけで、中房をとりまいて珠文帯があり、外区にも珠文帯があります。縁は平縁です。このような軒丸瓦に対し、軒平瓦の最も古いものは、通常の形をした四重弧文でしょう。次に瓦当面の下端を波形に押し込んだものがあり、これには重弧をはっきり作ったものと、単に凹線でえがいたものの二種類があるようです。以上のものは白鳳時代から奈良時代に位置するものと思われるかもしれませんが、なおこれらよりやや時代が降ると考えられる均齊唐草文の軒平瓦があります。

蒲生町では、宮井と綺田に古い瓦を出す寺院跡があります。そのほか、宮川でも、宮井のものと同種の瓦が出土しますが、ここにも寺院があったのか、あるいは宮井廃寺の瓦を焼いた窯があったのか、今後の調査に待たねばなりません。また、蒲生堂にも寺院跡とも考えられる遺跡がありますが、これも不確かです。確定は今後の調査が必要です。さらに綺

田に近い石塔に、白鳳時代とされるわが国最古の三重石塔で有名な石塔寺がありますが、瓦に関してはなお調査を行う必要があります。したがって、ここでは宮井と綺田の出土古瓦について述べ、あわせて宮川出土のものを示すこととします。

宮井廃寺は昨年塔跡や諸堂の遺構が発掘調査され、瓦類も沢山出土しました。さらに雪野寺ほどではありませんが塑像片も出土し、その中には金箔の残っているものもありました。瓦について見ますと、軒丸瓦の中心は雷文縁のものです。宮井廃寺から雷文縁の瓦が出土することは早くから知られていましたが、最近出土したものは量も多く、その上種類も多くて、瓦の文様から見て、従来いわれていた白鳳時代だけでなく、平安時代と思われるものまであります。そのうちの三種類を示しましょう。一は複弁系のもので、1+6の蓮子をもつ中房に複弁8葉の蓮華文があり、外区の雷文を一段高い平縁がとりまいています。もう一つは単弁16葉のもので、蓮子の数は前者と同じく1+6で、雷文をとりまいて平縁のあることも変わりませんが、雷文は前者とは異なっています。さらにもう一つ、ちょっと変わったものを紹介しましょう。これは単弁16葉のようですが、弁の形は大分崩れています。特に蓮子のあり方が特殊で、普通円形に並ぶ蓮子が方形に9個並んでいるのです。このような蓮子の並び方はあまり見られません。次に、雪野寺にも見られた1個の蓮子をもつ中房をとりまいて珠文帯があり、外区にも珠文帯のあるものがここでも見られます。また、複弁6葉で、外縁に円圏をもつものもあります。これの蓮子は1+5と思われます。軒平瓦では、瓦当下端を波形に押しした重弧文



宮井出土古瓦拓本

が多く見られます。写真でその下端の波形を示しておきました。また、均齊唐草文の外区に小さな珠



特殊な叩き文

思われる珍しいものがありますので、これも掲載して参考に供します。

綺田廃寺出土古瓦の中にも、雪野寺や宮井



綺田出土古瓦拓本

廃寺出土と同じ単弁8葉のものがあります。すなわち、蓮子が1個で、珠文帯が中房の外周

と外区にあるものです。このほか、子葉をもたない細いつくりの単弁8葉で、中房が小さくて蓮子が1+4のものがあります。これと同種のもので彦根市の屋中寺跡で見られますが、珠文をもつ円圏が弁をとりまいているのが屋中寺のものとは異なります。示した拓本は長浜市の早崎氏のものです。また、単弁12葉で、中房が大きく、蓮子は1+6と思われる時代の降るものもあります。



綺田出土古瓦拓本

これの拓本は「蒲生郡志」所載のものです。

近江八幡市の古瓦

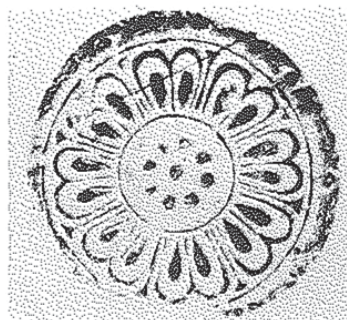
長光寺で重弧文軒平瓦が出土しています。しかしここではこれだけのようですので、詳しい寺院遺構などは不明です。倉橋部では、安吉神社の付近に古瓦の出土があります。これは単弁8葉に、太い線であらく施された鋸歯文の縁をめぐらしたものです。中房は比較的小さく、1+8の蓮子があります。この付近ではほかにも古瓦の小破片が出土してい

ますが、寺院に関する遺構はわかりません。千僧供では、八日市市の瓦屋寺で触れた子葉をもたない素弁の軒丸瓦が見られます。弁の数は9個か10個か正確には申せませんが、恐らく10葉とすべきでしょう。中房の表面が剥落しているので、蓮子の状態はわかりません。これまではこの瓦1個だけが知られていたのですが、最近、付近で雷文縁のものが1個と特殊な単弁8葉のものが1個発見されました。雷文縁のものは縁の一部しかわかりませんが、内区の蓮弁の状態は不明です。これらはまだ調査が継続されていますので、詳細は後日を期したいと思います。

安養寺では数多くの瓦が発見され、礎石や石造五重塔も残っています。しかし、現状では寺院遺構についてはほとんどわかりません。出土の古瓦は軒丸瓦が多く、しかも単弁系のものがほとんどです。軒平瓦では、重弧文のものが1個と、平安時代まで降ると思われるものの破片が数点あるだけです。したがって、ここでは軒丸瓦について述べることにします。まず、単弁8葉で中房が極端に小さく蓮子数4個と推測されるものがあります。これは中房が小さいため、弁も子葉も長くなっています。次に、やはり単弁8葉ですが、中房は前者よりはやや大きく、蓮子も1+5と二重のものがあります。この縁は比較的粗い輻線文であることに特色があります。この輻線文をもつ古瓦は、県下では大津市滋賀あたりに少し見られるようです。また、無文の平縁がめぐる単弁8葉のものや、同じ単弁8葉ですが、弁の肩部が角張っており、中房の蓮子は1+8と思われ、外縁には鋸歯文が施されているものなどがあります。複弁系のものは、幅広い鋸歯文縁をもち、中房は大きくて蓮子が1+6+10と三重になっているものです。

加茂には泥塔が出土した寺院跡があります。これも寺院遺構はほとんど不明です。出土の古瓦は平安時代のもので、ここには軒丸瓦を掲げました。このような唐草文様の軒丸

瓦は、大津市の瀬田や国分・滋賀・比叡山等で見られます。船木にも、寺院遺構はわかりませんが古瓦の出土する遺構があります。ここでは、



船木出土古瓦拓本

単弁系・複弁系両方の軒丸瓦が見られますが、複弁系のもは「蒲生郡志」所載の拓本を示すこととします。単弁系のもは、比較的丸味を帯びた弁に、線で輪郭を描く子葉があり、蓮子は1+8のものです。外区には鋸歯文がめぐっており、それを平縁がとりまいているようです。複弁系のもは8葉で蓮子は1+8です。外縁には鋸歯文がめぐっていることが他の破片の拓本でわかります。

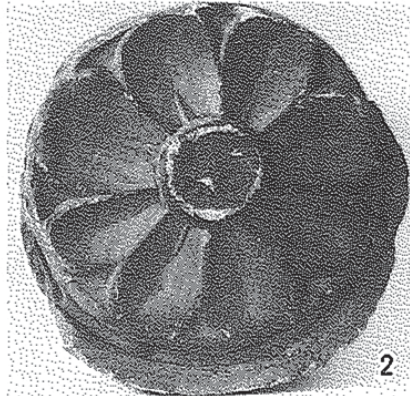
(西田 弘氏提供)



- | | |
|-------------|---------|
| 1. 能登川側安土山下 | 11. 倉橋部 |
| 2. 小川 | 12. 千僧供 |
| 3. 法堂寺 | 13. 安養寺 |
| 4. 木流 | 14. 加茂 |
| 5. 瓦屋寺 | 15. 船木 |
| 6. 安土 | 16. 猪子 |
| 7. 雪野寺 | 17. 宮川 |
| 8. 宮井 | 18. 蒲生堂 |
| 9. 綺田 | 19. 石塔寺 |
| 10. 長光寺 | |



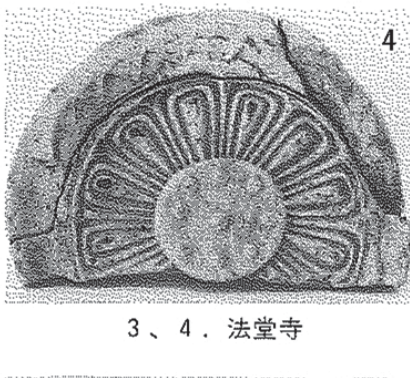
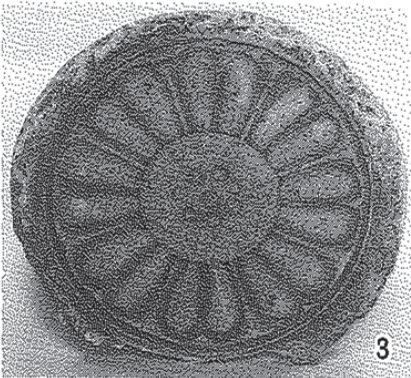
1. 能登川側安土山



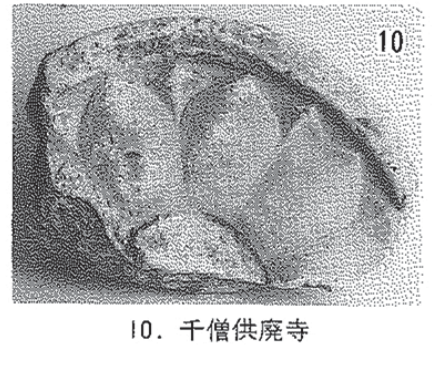
2. 安土廃寺



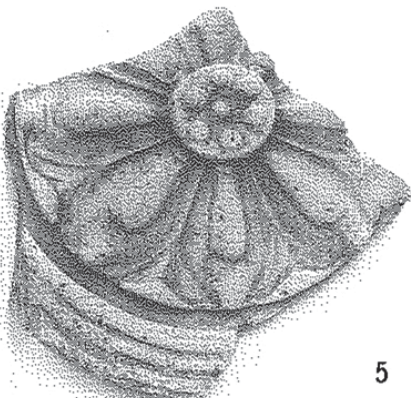
9. 倉橋部廃寺



3、4. 法堂寺



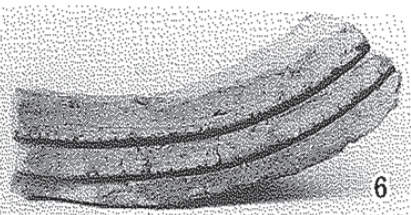
10. 千僧供廃寺



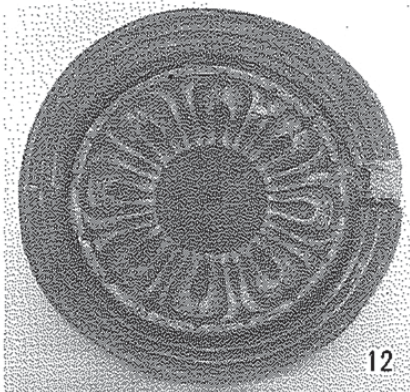
8. 長光寺廃寺



11



5、6. 木流廃寺



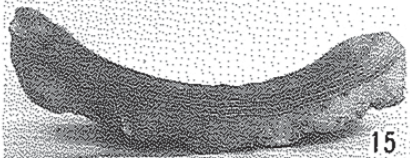
12



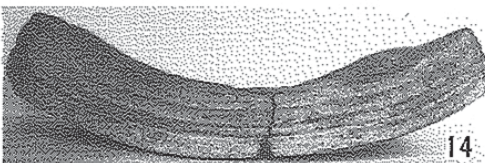
13



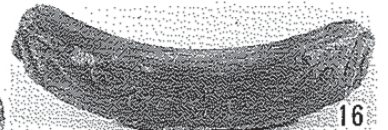
7. 瓦屋寺



15



14

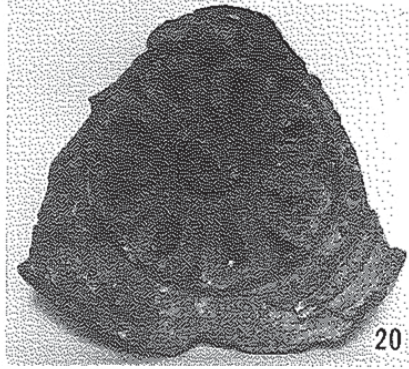


16

11~16 雪野寺



17

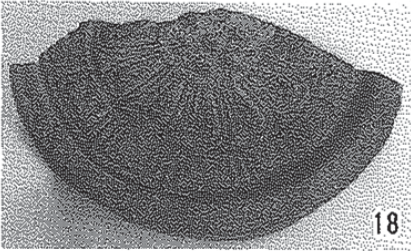


20

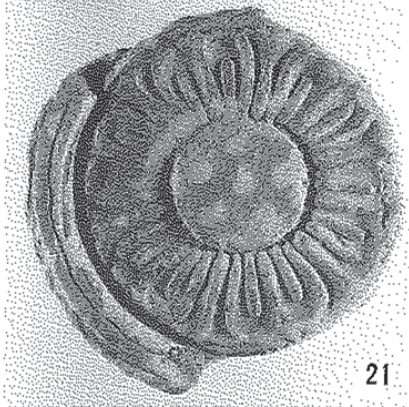


24

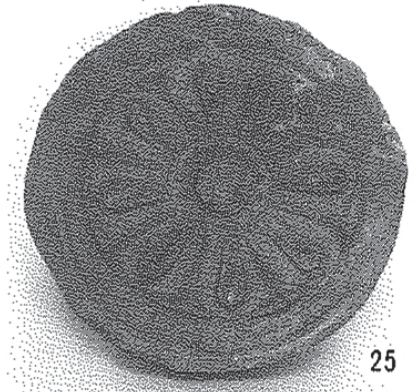
24. 宮川



18

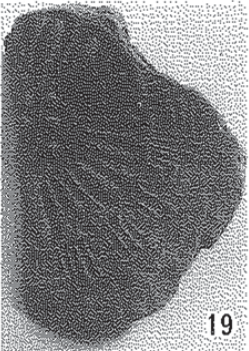


21



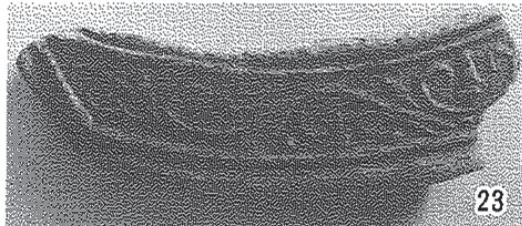
25

25. 綺田廃寺



19

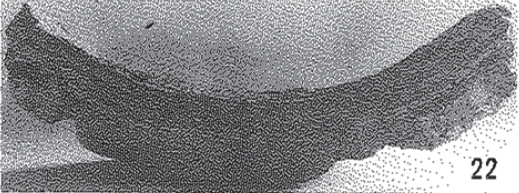
17~23
宮井廃寺



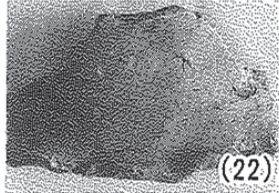
23



26



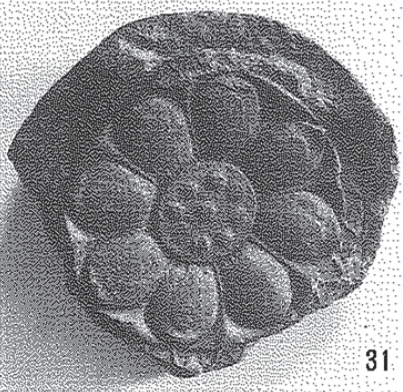
22



(22)



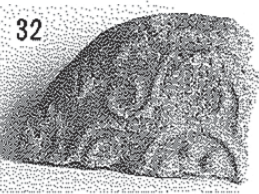
27



31



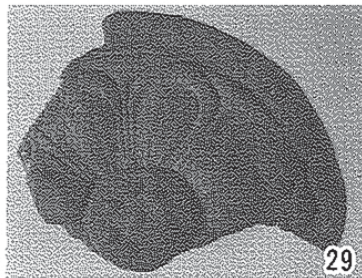
28



32

31. 船木廃寺

32. 加茂廃寺



29



30

26~30 安養寺廃寺